お元気ですか

2026年11月 211号



発行所 （福）横浜市社会福祉協議会
障害者支援センター
〒231-8482 横浜市中区桜木町1丁目1番地
横浜市健康福祉総合センター9階
045-681-1211（代表） 045-680-1550
https://www.yokohamashakyo.jp/siencenter/
編集発行人 内嶋　順一

横浜市　障害者支援センター　検索

障害者支援センターの
ホームページはこちらから

地域活動ホームシーサイド × 神奈川県立金沢支援学校

おもちゃ文庫を通じたつながり

地域活動ホームシーサイドでは令和7年度末から、金沢支援学校高等部の生徒が制作した作品を「おもちゃ文庫」で活用する取り組みを行っています。

「地域に知ってもらいたい、学びの場が欲しい」という学校のニーズと「子育て広場として魅力を高めたい」というおもちゃ文庫のニーズがマッチングしたこの取り組み。

今回は、このコラボレーションを通して感じた協働の楽しさや、その魅力について取材しました。

～おもちゃ文庫とは～

おもちゃ文庫は、障害の有無にかかわらず、誰もが参加できる地域の交流の場として、また、地域住民同士のふれあいの場として多くの親子に親しまれています。子育てに関するモヤモヤした悩みも相談でき、お子さんと家族が安心して過ごすことができる場です。子どもたちがおもちゃを通して楽しく遊びながら、人とのつながりを育むことを目的に、各区の地域活動ホームで定期的に開催されています。



～コラボレーション事業について～

金沢支援学校知的障害教育部門の高等部では、以前から職業の授業において外部との連携が行われており、生徒は製品作りの一部を担うことで、責任感と達成感を得る機会になっています。今回は、肢体不自由教育部門の保護者であり、おもちゃ文庫の職員でもある矢田さんが、校内の様子を見学したり連携支援グループの安藤先生と意見交換を行ったりしたことをきっかけに、肢体不自由教育部門の生徒とのコラボレーション事業が実現しました。

現在は生徒の皆さんが、職業の授業で作成した壁画やマラカス等のおもちゃをおもちゃ文庫へ納品しています。壁画は季節ごとに作成しており、おもちゃ文庫への取材時は桜をイメージしたものが掲示されていました。





地域活動ホームシーサイド



地域活動ホームシーサイド　矢田さん

Q：金沢支援学校とのコラボをすることになったきっかけや、思いは？

A：障害児者とのかかわり方に不安を抱く人もいるかもしれませんが、我が子が楽しそうに遊んでいるおもちゃを作ってくれた人に対して、嫌悪感を抱く人はいないと思います。この取り組みが、障害児者を身近に感じ、その存在や可能性を知るきっかけになればよいと考えています。
また、今までは手作りおもちゃはほとんど職員が作成していたので、生徒さんが作ってくれるのはとてもありがたいです。

Q：来場される保護者の方から何か声は聞かれますか？

A：近所に金沢支援学校があることは知っていても、実際にどのような学校なのかまでは十分に知られておらず、おもちゃの説明掲示を見て「高校があるんですね」と言われたこともあります。地域の方に学校を身近に感じてもらえたら嬉しいです。

保護者の声

自宅で子どもをずっと見るのは大変ですが、おもちゃ文庫に来ると職員の方も見守ってくれるので良い息抜きになっています。また、兄弟もいないので、ここで同年代のお子さんと遊んで社会性も身に付けてほしいなと思います。

県立金沢支援学校



県立金沢支援学校　安藤先生



Q：シーサイドとのコラボに期待することは？

A：単に作品を作ることだけでなく、地域とのつながりを通して社会との関わりを実感できる機会になることを期待しています。実際に誰かに見て喜んでもらうことが生徒たちの意欲や達成感にもつながっていると感じています。

Q：地域と関わることで得られる学びはありますか？

A：自分たちが作った作品が活用されることで「地域社会の一員として誰かの役に立っている」という実感を得られる大事な機会になっています。
また、制作から納品までの流れを経験することで仕事や社会参加のイメージを持つこともでき、シチズンシップ教育を進める上でも大切な機会となっています。

Q：作品を制作するにあたって工夫していることはありますか？

A：生徒によって得意なことや手指の操作性が異なるため一人ひとりが無理なく参加できるよう、道具や材料を工夫したり、作業内容を調整したりしながら、それぞれが達成感を味わえるようにしています。

楽しい！もっとやりたい。

ボランティアさん紹介

さかえ福祉活動ホーム（栄区）olu olu　山本（やまもと）さん・田中（たなか）さん

活動歴50年以上の山本さんと、活動歴4年の田中さん。ボランティアとして創作活動や日中活動のサポートを行っています。活動を始めたきっかけも活動歴も異なりますが、お二人のお話から共通して伝わってきたのは、「ひとりひとりを大切にする」という想いでした。

山本さんは、50年以上にわたりボランティア活動を続けてこられました。時代とともに活動内容が変化する中でも、常に関わる方を尊重し、その人らしさを大切にしてこられました。「障害があるかどうかではなく、一人ひとり違う。その人を大切にしたい。」という言葉が印象に残ります。また、活動は「自分にとっての居場所」でもあると話されていました。

田中さんは、元々得意であったさをり織りを通じて携われることを知り、活動をスタートされました。メンバーさんの創作活動のサポートをする中で、一人ひとりの個性やペースに合わせた関わりを大切にし「寄り添うとはどういうことか」を山本さんの姿から学んでいると話してくださいました。

お二人が口をそろえて話されたのは、「何かをしてあげる」のではなく「一緒に時間を過ごす」ということでした。そして、「私たちがもらっているものの方が多い」という言葉には、活動の喜びが詰まっているように感じました。山本さんにとっても田中さんにとっても、ボランティアは誰かのためだけではなく、自分自身も支えられ、学びを得る時間となっています。

活動歴やきっかけは違っても「ひとりひとりを大切にする」という思いは自然に受け継がれていました。お二人のお話から、人とのつながりは、ともに過ごす何気ない時間の中で育まれていくものだと感じました。



メンバーの皆さんの作品



田中さん　山本さん

横浜あゆみ荘　ワークショップ

～ 夏休み親子体験教室アルファベット文字のブローチ作り ～

ワークショップについて

令和８年７月25日（土）、横浜あゆみ荘の研修室においてワークショップを開催し、22 名の皆様にご参加いただきました。

今回は、糸を ×（クロス）の形に交差させながら模様や絵柄を表現する刺繍技法「クロスステッチ」を用いて、ブローチを制作しました。講師は中途障害者地域活動センター港北根っこの会の皆様にご担当いただきました。制作に参加した子どもたちは想像以上の細かい作業に悪戦苦闘でしたが、とてもかわいい作品の完成に笑顔がこぼれていました。





伊藤 繁夫 さん

中途障害者地域活動センター
港北根っこの会 メンバー 伊藤繁夫さん インタビュー

講師を務めてくださった伊藤さんは、今回のワークショップについて「子どもたちが一生懸命制作し、完成したブローチを身に付けて喜んでいる姿を見ることができ、とても嬉しかったです」と話してくださいました。

また、伊藤さんはクロスステッチの魅力を、「糸の色合いを考えながら制作すること」とおっしゃり、イメージしていたものとは異なる色合いに仕上がったときに新たな発見や楽しさを感じるそうです。現在は星座をモチーフにしたクロスステッチ作品を制作しており、中でも「ふたご座」の作品がお気に入りとのことでした。

進路対策研究会

生徒の進路を考える先生方の取り組みについて

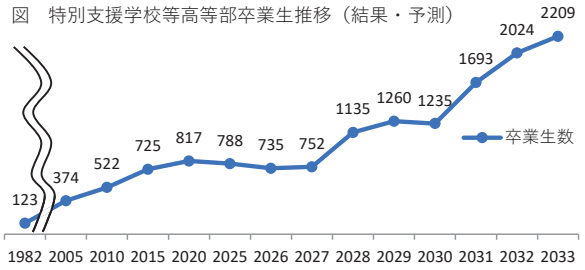


進路対策研究会は昭和59年から実施されている横浜市内の生徒が通う特別支援学校等47校（分教室を含めると63校）の進路担当者及び行政担当者、教育委員会担当者が進路の調査、諸問題の検討を行う研究会です。今回は令和8年度進路対策研究会委員長である横浜市立左近山特別支援学校進路専任の髙橋雄太先生にお話を伺いました。

Q1.生徒の推移について教えてください。

右図は、特別支援学校やサポート校等を卒業する市内在住者の数です。1982年の卒業生は123名でしたが、2032年には2000名を超える予測となっています。

図　特別支援学校等高等部卒業生推移（結果・予測）



令和7年度「進路対策研究会」進路調査より抜粋
抜粋版は支援センターのHPから見ることができます。
二次元コード参照。

Q2.進路にはどんな課題がありますか？

医療的ケアを必要とする生徒や強度行動障害がある生徒の受け入れ先が少ない現状があります。そのため、通所希望日数を満たせなかったり、在宅となったりすることもあります。複数の事業所を並行利用することで本人や保護者の負担になっている場合もあります。放課後等デイサービスを利用できなくなった後の送迎や夕方の過ごし方、いわゆる「18歳の壁」も大きな課題です。

Q3.進路対策研究会ではどんな取組をされていますか？

各種調査を通じ浮き彫りになった課題を様々な関係機関に提示し、問題解決を図ることがこの研究会の大きな役割です。例えば重心調査では重症心身障害児童生徒や医療的ケアを要する児童生徒等の在籍者数などを集計分析しています。結果を元に市内の日中活動サービス事業所と連絡会議を開催したり、横浜市健康福祉局と意見交換会を実施しています。



Q4.今後の展望についてお聞かせください。

本研究会は、国立、県立、市立、私立を越えて構成される研究会です。進路指導の課題を各校だけで抱え込まず、課題を共有し解決していく機関があるのは全国的にも稀だと思います。予測困難な社会と言われる今日だからこそ各校が一致団結し、障害がある生徒達が安心して生活ができるよう様々な取り組みをしていく必要があると考えます。

望遠鏡



20年前、国連での障害者権利条約採択に向けた流れの中、逆行するかのような障害者自立支援法が施行され、応益負担に対して障害者の生きる権利について大きな運動が起こりました。そして、忘れてはいけない10年前の痛ましい津久井やまゆり園事件です。ここでは、見えない優生思想と重度障害者の生きる権利に対して大きな議論となりました。私が、この仕事を始めて30年ちょっと。制度もよくなってきてはいますが、障害のある方の権利はどうでしょうか？まだまだ、力不足を感じる毎日です。

横浜市障害者地域作業所連絡会　谷口　実